# 人鬼

巻の一

美妙

本間文庫
文庫 14
A 52
1

本間文庫

文庫K
A52
1

# 人の魁

美妙著

中の巻　一のき

同じ浮世同じ人、しかも！　色ごとにかけて陥るべく目標ら。陥るにはいつも色に陥る人こそ多けれ。浮

いつも一身に迷ひて人の見るも知らぬ有様である。陥るの

人ぶれて、その小さき人のため少しく世を陥る

「そなたゆゑ、たれが為にいとしらしいのぢゃ。」

けいこいたしてゐる

ひそかに紙をしらべつゝ、いとしらしいのぢゃ。さゝの(?)手の恋心

さらさら親と、さらさら紙をしらべつゝ、のぢゃ。」

ちぎりをかはす恋の闇をまもりて、恋めく

みるめもいとゞ

お姫さとりまするよりは、おもひに暇かな

まゝならぬ

めぐりの女子のかなしさぼんに浮世よ。

「ちょつと」右へまはりて宇治の衣女のにほひ

わけがある。

「どうしたらよいね、お姫さま。さ、早う早う

ござんす

情を知らぬつれなさの」

やるせない胸のうち。

「これまた申して見るより、世をさかしまにすることのねえ。

その子どもを[illegible]……しもうとした[illegible]

阪神。

上田さんの家から[illegible]行(ゆ)き[illegible]である。

「みつのさん」。

「……」

「かあさんが[illegible]」

蛍。[illegible]

之[illegible]。[illegible]

〇

「[illegible]、[illegible]」と[illegible]。

「おい、お[illegible]……」

「[illegible]、又[illegible]」と[illegible]。

コレヤラ
第二回

考ヘられるのである。

行くと向の畑とを出でゝ、

貳

向の方に見える。

コレカラガ
二回トナル

元

のえに忍び固あるやうであるが、左様に頑であつて、頑である

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　み

つゝ、さいしに尊きのが、いしのいつてい修せ

　　　　　　　　　　　　　　　その　　み　　　　　　　　　その

をいつてつらぬく。中でも力をあらはすものである。然し、

み　　　　　　ね

あまだ文字のうち存在なし。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　び　　　　　　　　　　　　　　て

つけるを指して阿弥陀の仏如である。されば、眼を拝でい

　　　　　び　　　　　　　　　　　　み　　　　び

つけてくれる指でさせ、指、母親の、慈母の、慈悲を知

む　　ね

て指でさせ。　指、無量寿の阿弥陀仏を指である。　指

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　み　　　　　つ

ありますのでございまして、その力を示すので、指である。　現に

　　び

之を指す阿弥陀、阿弥陀の阿弥陀仏と同一のものである。

之

して、これを指す中の真実と、慈悲の真体と同一のものである。

日であつて、日は同じ日の仏である。　　　　　あらためて称へたのである。

光明を見奉るのである。